

2021年11月15日

コース主任 北折貴子

1. 学生が身につけるべき資質・能力について

・時間の使い方、優先順位の立て方が苦手な方が多い

→2年生モードクリエーションの授業時間の中では、オリジナル制作のものが少なく、どうしてもこちらで時間や作業の組み立てして、学生はそれをそのまま受けるだけになってしまっています。オリジナルのものに関しては、自身で作業工程を組み立てさせていますが、作業の優先順位は立てられていないのかなと感じました。指導の中で、優先順位を立てて時間の無駄がないようにさせていく必要があると思いました。

→3・4年生は応用になるが、コロナ禍ということで短主授業になり予定通り進められないことも多々あったが、今後事前に各自で予定を出させ自分の時間の使い方について考えさせようと思っている。

・比較的早めに諦めがちで、働く事に見切りをつける傾向がある

→2年生モードクリエーションの制作の中でもやり直すということが嫌な学生が多く、余程のことではない限り、自身が良いのであれば先に進めていいと作業を続行させてしまうことがあります。学生自身も早くに諦め、作業を続行することが多いです。直しは当たり前と思いますが、学生にはモチベーションを下げってしまうのか、作業が遅くなったり、授業に来なくなったりとあまりいいとは思えない方向に繋がってしまっているように感じます。しかし、売られているものと同様に綺麗な作品制作を当たり前とし、1年生ではなく、2年生でコースを選択して作ることに意欲を持っているはずですので、1回程度の直しは当たり前させるように指導改善していこうと思います。

→多くの企業が「コミュニケーション能力」を学生が身につけるべき資質・能力の最重要事項として挙げている。社会において幅広い年代の人との関わり、社会や仕事への関わりなど、あらゆることに「関わる」ためには、コミュニケーション能力が重要であるためと理解する。しかしその能力が現在の学生の最大のウィークポイントであると日々の授業を通して感じている。他者との違いを表面化させないことを是とするためか、ディスカッションでも受け身でいる。また、物事の背景を想像して推し量ることも不得手な学生が少なくない。コミュニケーション能力は一朝一夕には身につかないため、可能な限りディスカッションやプレゼンテーションなどを授業内で行いながら改善を図りたい。また、セミナーの開催も一案ではないかと考える。

SDGs や DX の推進など、現在の日本として取り組まなければならない社会的な問題に対する意識を持っている学生の割合が低いように感じる。SDGs において「つくる責任」を意識することはアパレル業界にとって非常に重要である。また、学生の中にはスマホは自由に扱うのに PC 操作に苦手意識を持つ学生が存在する。今後 DX 推進が加速度的に進むことが予想されるため、教育課程の編成においてデジタル技術とその技術利用の可能性を広げる思考力が必要となる。単に授業内に取り込むだけでなく、独立した科目としての対応が必要と感じた。

また3・4年生は自分のデザインということでこだわる学生は直しも厭わないがこだわりのない学生は課題を出すことだけで満足してしまう。講評会などで評価をしながらディスカッションするがその際もこ

だわりのない学生は意見が出ない。そのため、今後必ず意見を言うように促す予定である。また働くことについては現状アパレル業界が厳しいこともあり保護者からも必ずしも就職を考えなくてよいといわれている学生も多くいる。しかしせっかく身につけた知識や技術を社会に生かす大切さを説いていこうと思う。

・失敗を恐れないチャレンジ精神と、壁にぶつかった際に問題解決につながる前向きさが必要であると考える

→上記でも書いたように失敗＝モチベーションの低下、気持ちの切り替えができないのか作業進度に影響してきたりしているように感じます。乗り切った際には、明らかに前と比べても良い結果になることが多いため、声掛けは必要だと思いました。褒められると嬉しくなる学生は多いように感じます。なるべく、前向きな言葉と成功後の褒めの言葉で失敗しても問題ないと思うように考え方を見直してもらいたいと思います。

→精神的に弱い学生が増えており、失敗や壁にぶつかったときに逃げがちである。少しでも個人の良さを引き出せるように教員も工夫していきたい。

【企業】2021年度 大学「外部評価アンケート」改善案

SDGsの取り組みについては本コースで、考慮しているのが、トワル（天竺）を多く使用しないという観点である。その内容を周知していないで今後の改善はないといっても過言ではない。アセスメントポリシーや就職は、ドレーピングでの作業なので、そのトワルは充実させるのが、改善案である。

具体例

3201 教室 ドレーピング用のボディ（杉野ボディ）を2年次で購入しそこに搬入する。

3年のドレーピング教室がないので3201教室を使用する。（2年3年4年共用とする）パターンメイキング検定の合格率を上げるために、自習時間に教室を提供する。（但し、教室は、コースの授業としてだけでなく、授業として1年生も使用可能とする。）

昨年に引き続き、他者を意識することとコミュニケーション能力の向上がある。その為には、他者との関わりにおいて自己を知り、チャレンジ精神につながる自己肯定感と個になりすぎない役割についての意識が必要と感じた。また今年度はより変化に対応できる力についてご意見があったと思う。コロナ以降の過渡期としてデジタルとアナログ（オンライン、オフライン）の両方を理解することも必要である。

◆様々なご意見から特に重要視した点

- ・他者へ伝える力。自分の考えとグループの考えを他者に伝える力。その中で信頼関係を築き、責任感を持って取り組む力、質問力（個人になりすぎている）
- ・アイデアプレゼンなど自ら考える機会を増やす
- ・時間の使い方、優先順位の立て方
- ・自分の資質を客観視する力・チャレンジ精神と挫折の経験（成長する力）
- ・市場に求められているものは何なのかを俯瞰的に分析する力
- ・PCスキル（デザイン画のデジタル化、オンライン対応）
- ・「〇〇とは」を常に問いかける姿勢
- ・感性、完成度重視。承認欲求が満たされすぎている。合格ボーダーラインを高くする。
- ・コース別教育目的と目標に対して学習効果測定の結果、検証はどのように共有されているか。反映されているか。実社会の評価とややずれている。
- ・プロフェッショナルな方に触れる機会を設ける

◆コースでの取り組み方法

- ・プレゼンテーションの実施
自らの考えを整理し、自らの言葉で他者に伝えることで、お互いを意識し相互に学ぶ機会を増やす。
物事の前後の流れを感じ、予測する力となる
 - ・授業内容の取組の意味を理解し、スケジュールから、提出までを自分の計画で進行する
 - ・チーム調査発表、制作の実施
チームを通して役割を知り、意見を述べる場を体験する。互いの意見の良いところを伸ばし、改善をする場とする。学びについて受け身ではなく一員として動く役割のようなものを体験する。経験、体験の場をつくる
 - ・プレゼンとディスカッションの場を増やす
 - ・市場を意識した内容を取り入れる
 - ・レポート提出など自分の学びをフィードバックする機会を設ける
 - ・褒めることで自信を与えるのではなく、達成感で自信が得られるようにする。
 - ・社会人としての平均を評価に取り入れる。またその理由を明確にすることで理解を深める
 - ・外部評価員や外部講師をお招きし、社会への広がりや、考え方を学ぶ機会を設ける
- 既に取り組んでいる内容もありますが、もっと強化していきたいと思います。

企業側からの要望で最も多く見られたのがコミュニケーション能力に関することであった。本コースでは、従来、産学協同プロジェクト（3年次）や卒業制作（4年次）に於いて、グループ単位で、制作を行っている。個人制作の場合と異なり他者とのコミュニケーションが成果に大きく影響を及ぼすはずである。

しかし、近年グループワークを観ていて感じることは、チーム内で提案された意見に対し、質問も無ければ反対意見も極めて少ない。これには、いろいろなことが考えられるが自分自身の意見が無く従って代替案も考え出せず発言しない。他のメンバーに良く思われたいから反対意見を言わない。発言することでやらなければいけないことを増やしたくないなど消極的で受け身な姿勢が目につく。

いずれもコミュニケーション以前の問題である。日常において積極的に話しをすることで他者との距離を縮めることが苦手であり、ごく限られた気心の知れた者同士でしかコミュニケーションがとれない。結果的にグループで資料収集を行わなければならないフィールドワークなどでもコミュニケーション不足のため効果的な資料となっていないことが多い。個々の資質も異なり能力の差も歴然であるメンバー同士の効果的なコミュニケーションを図る上では授業の内外を問わず様々な工夫が必要であることは間違いない。

現状では、グループワークを通じよりコミュニケーション能力を鍛え、授業本来の機能を高めるために関係教員全員のコンセンサスのもと指導を行なっている。プレゼンテーション、グループワークなどの機会をより有効に活かす方策を講じたい。

また、協同制作は必ずしもプラスの面だけではないが、敢えて継続して行なっている理由がある。他のもの作り同様プロダクトデザインに関わる上で特に重要なのが以下の事柄である。

自ら動くことで得られる市場の動向とトレンド性、直接手で触れ無ければ感じとることの不可能な材料の特性、工場技術者や職人さんからの最新設備や技術に関する情報の入手など。これらの情報を手に入れるためにはコミュニケーション力は絶対的に必要である。個人的に制作する場合でも全く同じである。

一方、協同制作では、このようにして得た情報を各グループ内で発表し、意見交換を行なうことによりコミュニケーションの果たす役割も理解できる。話し合いを重ねることで、たとえ僅かずつであってもグループでモノを作ることの面白さや楽しさを感じ、少しずつでもより良い作品にしたいという意欲が持てれば強制しなくても自然にメンバー同志のコミュニケーションが活発になるであろうと考えるからである。

企業サイドのアンケートに見られるコミュニケーション能力の問題は専門コースのみならず全学的に取組む問題でもある。すでに入学時から始まっている。改善策として、例えばサークル活動の活性化や特別ゼミの設定、他コースとの共同ワークショップの実施など学生同志の交流を促進させる機会を増やすことも考えられないではない。

コミュニケーションの問題に限らず、社会的な評価と要請に柔軟に対応し、本学の卒業生が一人でも多く社会で活躍できるよういっそうの工夫が必要だと感じた。

—大学外部評価会議を受けてコースとしての改善案—

ファッションビジネス・マネジメントコース

本年度外部評価会議において抽出されたポイントを整理すると以下の項目が重視される。①時事問題についての知識レベル向上、②自己表現・プレゼンテーション能力醸成、③販売経験や実社会との接続性、④コミュニケーション能力強化、⑤プロとの協業、産地・工場視察等の体験型カリキュラム推進、⑥理論だけではない実践的な能力醸成、⑦グループワーク、ディベート、ディスカッション等アクティブラーニングの推進、⑧SDG's等環境問題に対する取組み、などが挙げられる。

この8つのポイントについて、現在の授業内容におけるカバーリング範囲の確認と授業改善を行っていく。①については、市場変化を広い視野で分析していく事で補完されるものであり、既に多くの実施科目により広域にカバー出来ている。②、④、⑦については、それらをルーティンとする「産学連携プロジェクト」、「プレゼミ」等を筆頭に数多くの科目において対応している。今後もコースの目指すスキルと合致するものであり、更にそれら機会創出をはかっていきたい。③、⑤については、「産学連携プロジェクト」及び「店舗開発マネジメント論」を通じて広範に達成されているが「最前線＝現場」を知る事は重要であり、今後も更なる機会創出をはかっていきたい。具体的には現状に加えて、科目：「ファッションMD評価システム」を通じて強化推進をはかっていく。⑥についてはコースの目指す実践学の追求という指針とも整合性のある指摘箇所であり、コースとしてこれまでも每期改善を図ってきた。今後も更なる改善を行ってきたい。⑧については、2020年度より「産学連携プロジェクト」の後期の主題となっており、その内容の深化を今後も図ってきたい。

本年度の外部評価で強く示された項目については広範にカバー出来ている、あるいは現在進行中の内容が多く、コースの目指す方向性の確かさを改めて確認出来るものであった。一方で、それら達成度については未だ十分なものとは言えない。今後、成果の「見える化」をはかると共に、それぞれの内容の深化と効果測定を行う仕組み作りが必要である事を認識させるものである。加えて、外部評価を俯瞰すると「基礎作り」の大切さが浮かび上がる。今後、実社会が希求するファッションビジネスの「基礎」について再考をはかり、問題点の抽出および改善を図ってきたい。

いずれにせよファッションビジネスの領域は激変を続けており、その視点で捉えると常に改善の余地は存在する。今後も更に授業運営状況を注視し、時代変化のニーズを遅滞なく教育リテラシーに内包していく事に注力しながら改善を続けていきたい。

【企業】2021年度 外部評価アンケート調査 改善案

FB・流通イノベーションコース主任 五月女由紀子

1. 学生が身につける資質・能力について

大学で習得する技術以前に社会人としての責任感や姿勢が重要なことは当然である。本学の単位履修や課題提出など、約束の厳守などは、さらに厳しさをもって学生に対応することが必要である。次にコミュニケーション能力についても重視する企業が多いが、これは講義だけでなく、授業内のプレゼンテーションやディスカッションを増やすことで会話や協調性を習得していけると考える。

「想像力の欠如」を避けることは授業内でも自分の頭で考える事の訓練の積み重ねである。さらに、実務的なインターンシップや企業と接する授業の構築なども検討する課題である。

また、実際の業務に携わるとなれば複数の案件を平行して進める能力や、複数の知見が必要ということも多く企業が発言しており、コース内の専門性を深く追究することも大事だが、コースの枠を外した横の専門性を共有することも今後は考える必要があると感じた。

2. 教育課程の編成と教育方法について

多くの企業の発言から感じられたのは、アフターコロナに至っても、業務のデジタル化強化は継続していくことである。デジタルスキルやデジタルコミュニケーションを取り入れた教育は他大学に遅れをとらないように気をつけなければいけない。教員のリテラシーアップは必要である。また、グローバル視点から留学に関する発言も見られ、この点においては本学の弱みでもあり、今後の課題である。

3. 入学者受け入れについて

少子化でファッションを目指す若者が減少することは時代の流れとして受け止めることである。今回の意見から、本学がクリエイティブな人材育成とデジタル人材育成の両面から教育をしている希少価値がある大学だという事を、広報として対外への情報発信で強化していくことが必要だと認識した。また、ファッションという切り口のみでは今後は厳しくなると推測され、どの企業も「ライフスタイル」という切り口で事業展開をせざるを得ない。本コースでは、ファッションに親和性があるライフスタイル系のビジネスも取り扱っている。大きく本学の基本方針から外れない枠の中でその競争力の優位性を学び、就職でも専門性分野として扱えることが、入学希望者にも好ましい印象を持たれるのではないかと思う。

4. コロナ禍を受けて今後の人材に必要なこと

多くの企業がデジタルスキルとITリテラシーの重視をあげており、理系とは違った本学の独自性あるデジタル教育の構築は必須である。まずは、イラストレーターとフォトショップはコースに関係なく必要最低限に習得するスキルであり、これは全学生がしっかり習得することを強化したい。また、リモートワークが推奨される昨今の時代背景の中で、オンラインでの打ち合わせや面接は、企業では必須であり、もはやコロナ時の特別な対策ではない。日常的に教員も学生も、授業や面談や会議で活用していく事が望ましい。